

ヒマラヤスギが伝える歴史



現在新校舎建設中の明治大学生田キャンパス中央校舎東側一帯（右図参照）。

この場所には2023年春までヒマラヤスギが立ち並んでいました（写真参照）。

このヒマラヤスギ一帯は土地の歴史、そして戦争の時代を私たちに伝え続ける場所でした。

かつてあったヒマラヤスギ一帯に注目することで見えてくる歴史をここでは紹介します。



1932（昭和7）年～1937（昭和12）年 日本高等拓植学校



1932年、ブラジル（アマゾン）開拓移民の指導者を教育する日本高等拓植学校が現・明治大学生田キャンパスの地に開設されました。

左上の写真は同校が開設されたばかりである1932年4月頃に撮影されたもの、右下の写真は1933年頃に撮影されたものです。

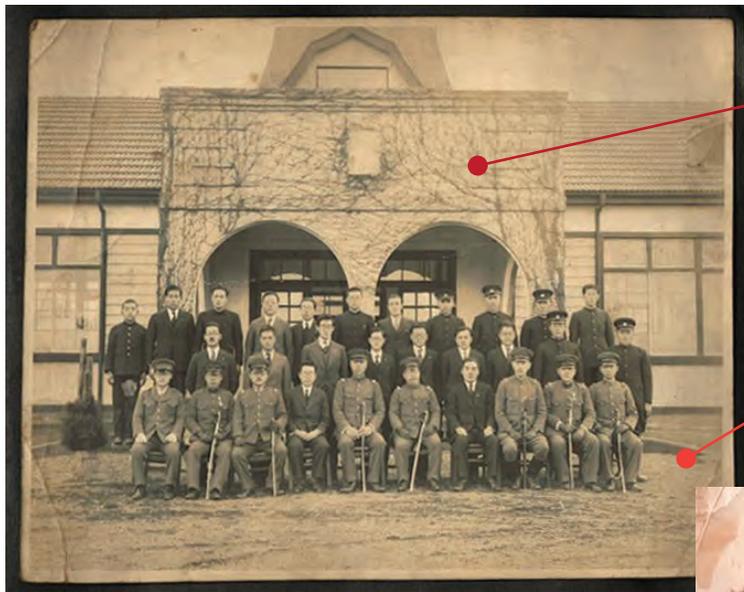
建物は日本高等拓植学校校舎です。校舎に沿ってヒマラヤスギがあることから（赤い▼部）、同校が植樹したと考えられます。1931年の満州事変以降、国策として満州移民が進められていく中、ブラジルへ移住を志望する者が減り、同校は1937年卒業生をもって閉校となりました。

※日本高等拓植学校の詳細については、資料館第一展示室のパネルをご覧ください

（写真：上塚芳郎氏 提供）



1937（昭和12）年～1945（昭和20）年 陸軍登戸研究所



本館（旧・日本高等拓植学校校舎）

円形整地部

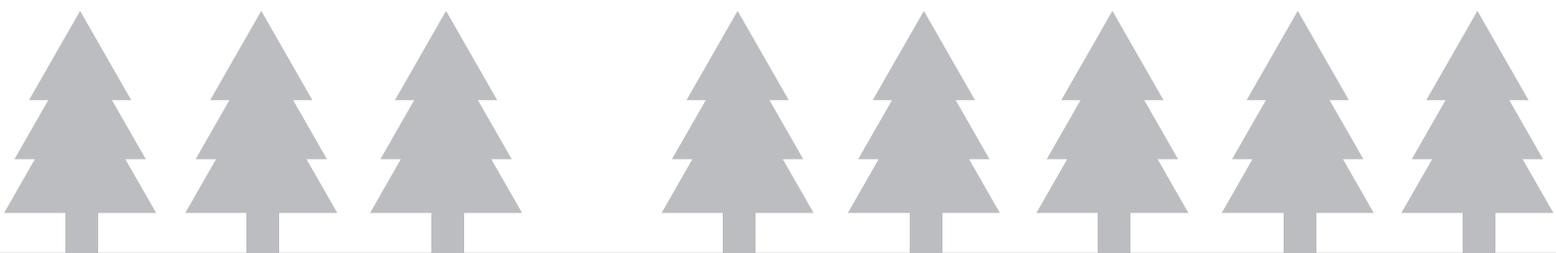
本館（旧・日本高等拓植学校校舎）



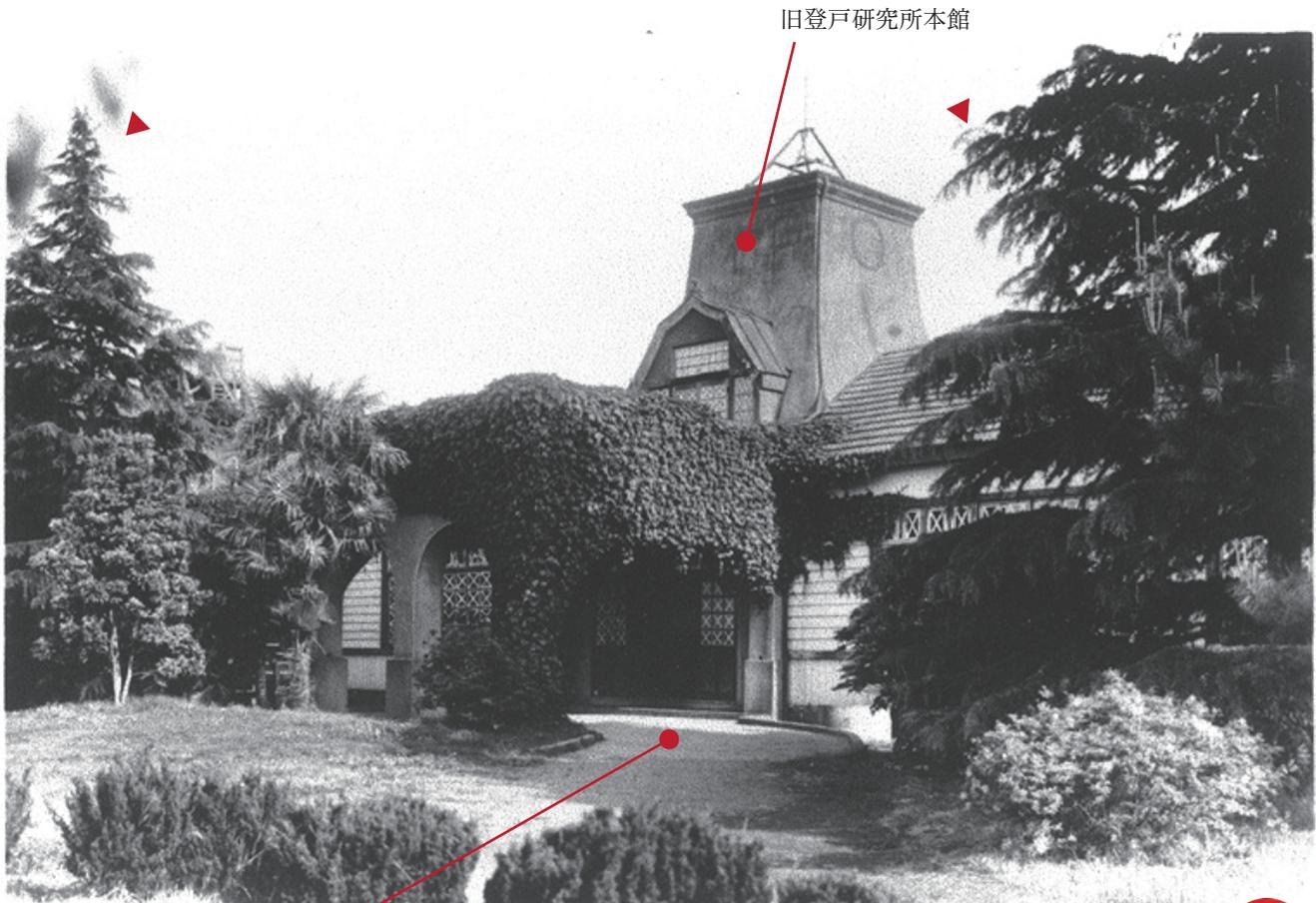
円形整地部

日本高等拓植学校閉校後，同地を陸軍が買収し，1937年に登戸実験場が開設されました（陸軍登戸研究所の前身）。登戸実験場および登戸研究所では，日本高等拓植学校の校舎を「本館」として使用していました。

上の写真は，登戸実験場開設直後の1937年12月に撮影された写真です。下の写真は，1944年に三笠宮が「ふ号（風船爆弾）」作戦の激励に訪れた際に本館前で撮影されたもので，ヒマラヤスギも確認できます。上の写真ではポーチ前が円形に整地されており，登戸実験場が整地したことがわかります。また，下の写真から円形整地部を後に植え込みにしたことがわかります。



1945（昭和20）年～1950（昭和25）年 慶應義塾大学予科登戸仮校舎



円形整地部

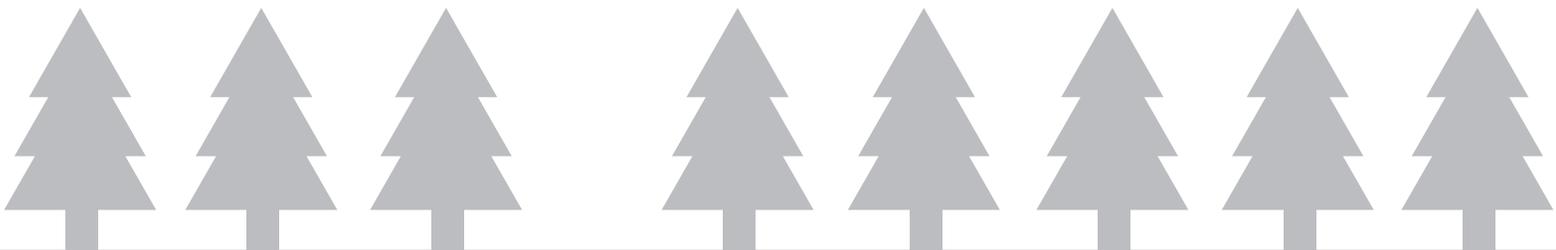
（写真：慶應義塾福澤研究センター所蔵）



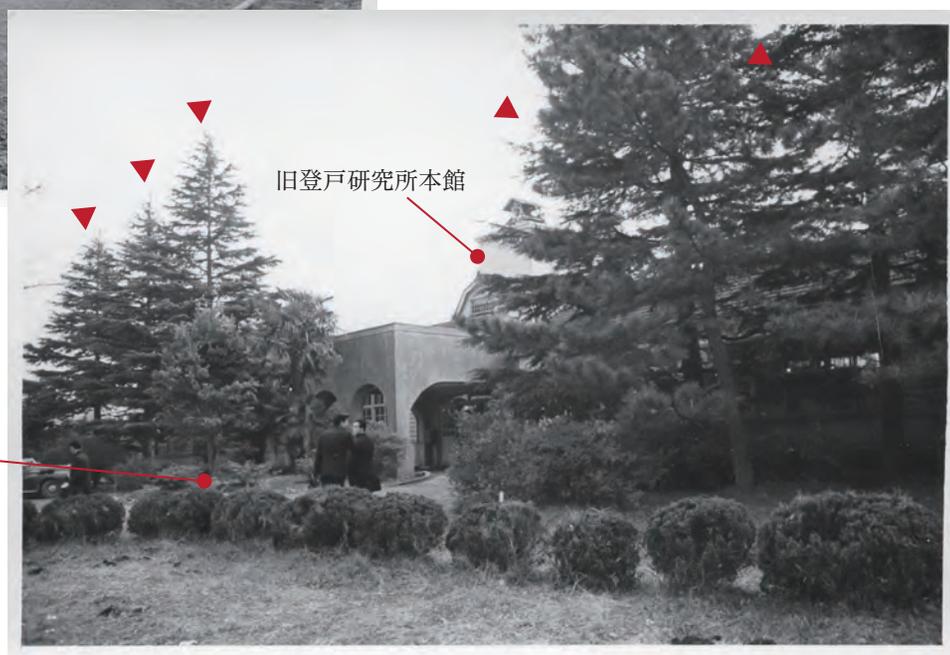
1945年8月の終戦とともに登戸研究所は閉鎖されました。

その後、GHQの接収によって日吉校舎を失った慶應義塾大学が、医学部・工学部予科と文科系予科の校舎として旧登戸研究所土地建物を借り受け、1945年10月から1950年3月まで使用しました。この写真は、同校が使用していた時代の写真です（上は建物裏側、下は正面から撮影）。旧登戸研究所「本館」は教室・事務室として使われていました。

ヒマラヤスギや円形整地部も確認できます。



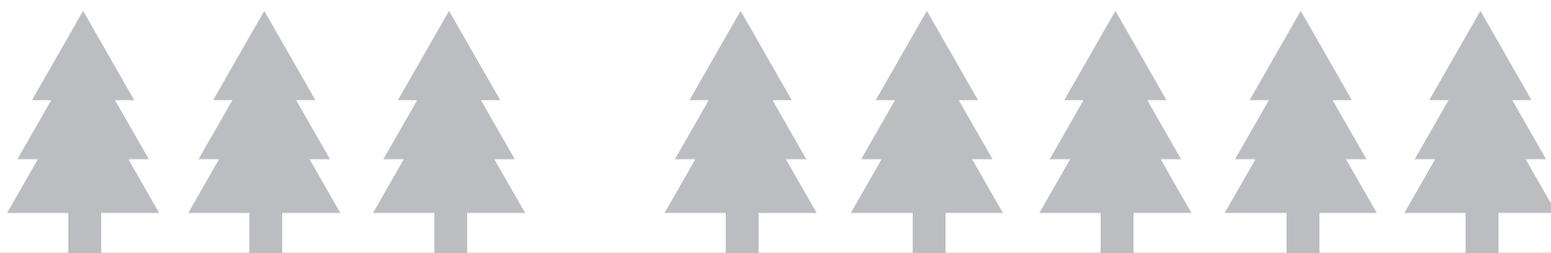
1950（昭和25）年～ 明治大学生田キャンパス



1949年10月、明治大学は新制農学部の新校舎を開設するため、大蔵省と登戸研究所跡地の買収交渉を始めます。1950年1月より旧登戸研究所建造物の修理が行われ、4月に慶應義塾大学予科登戸仮校舎が閉鎖されるのをもち、5月に明治大学生田校舎が開設されます。

写真は1950年代に撮影されたものです。明治大学では旧登戸研究所本館を、事務室や図書館、教職員ホールとして1992年の解体時まで使用しました。写真からはヒマラヤスギや円形整地部も確認することができます。

（写真：明治大学大学史資料センター所蔵）



現在と過去のつながり

2023年春まであった旧登戸研究所本館前周辺(2019年撮影)



登戸研究所時代の本館前周辺(1944年撮影)



登戸研究所本館周辺と 2023 年春までの同じ場所を見比べてみましょう。ヒマラヤスギや円形整地部が残っていたことがわかります。日本高等拓植学校から陸軍、慶應義塾大学そして明治大学へと使用者が移り変わるのにもとない、さまざまな歴史をみつめてきたヒマラヤスギ。現存はしませんが、2025 年春には新たな校舎に生まれ変わります。新校舎内には「ヒマラヤスギメモリアル」コーナーを設置し、敷地内には新たなヒマラヤスギが植樹され、これから先もこの地の歴史を伝え続けていきます。

※在りし日のヒマラヤスギ一帯の姿は、以下 URL や資料館内で美しい映像と共に振り返ることができます。ぜひご覧ください。

<https://www.meiji.ac.jp/noborito/mkmht000000e60ou.html>